北海道大学　大学院農学院　修士論文発表会，2018 年 2 月 8 日

食と農のリスクコミュニケーションを理解するプロセスのモデル検討

―大学院カリキュラム「食と農に関するリスクコミュニケーション」を事例に―

共生基盤学専攻　共生農業資源経済学講座　地域連携経済学　竹内琳加

１．背景と目的

近年，特に 2011 年の東日本大震災以降，食と農に関するリスクコミュニケーション（以下，RC）の関心が高まっている。RC とは「あるリスクについて行う個人・機関・集団間での情報や意見のやりとりの相互作用過程」であるが，現在の取組みの多くはその双方向性が確保されているとは言い難い。政府はこの問題を克服する一つの方法として専門職としてのリスクコミュニケーターの育成を掲げている。同時に，生産者や農協職員など現場で食や農に関わっている人々自身が RC に関する知識や技能を身に付け，必要に応じて実施できることも望ましい。このような想いから，北海道大学リスコミ職能教育プロジェクト（以下，北大 PJ）では，食と農に関する RC の素養を備えた人材育成のためのカリキュラム構築に 2014 年から取り組んできた。

そもそも RC の概念というものは，根本的な部分での共通理解はなされているものの，分野によって捉え方が異なったり目的や状況によって手法が変わったりと非常に幅広く，全体像を把握するのが難しい。しかし，多くの人が RC と関わることのできる社会を目指すためには，RC を個人が「理解する」ことが必要不可欠となる。

そこで本論文では，北大 PJ が行った今年度の試行カリキュラムを対象に，参加者が食と農に関する RC を理解したプロセスを明らかにし，そのモデルを示すことを目的とする。

２．方法

座学と実習から成る 4 日間のカリキュラムでは，毎日振り返りとして約 1 時間のディスカッションの時間をとった。本論文では，その対話記録を中心に，アンケートや小レポートなどの記述資料と合わせて総合的に分析を行う。また，RC の理解という点に関しては，RC の 3 つの本質的要素（①リスクへの適切な対応のために行われること，②多様な関与者の参加が求められること，③関与者の相互作用を重視していること）について発話すれば，自覚の有無に関わらず「理解した」と判断することとした。

３．結果と考察

分析の結果，個人の特性としては「肯定的／批判的」「知識量」「柔軟性」「当事者意識」，対話への向き合い方としては「深化型／展開型」といった分類軸が見つかった。さらに全員の共通点として，「応答者との掛け合いによって理解が促進されること」，「無自覚のうちに RC の本質的要素について言及していること」という点があげられた。以上から，当初の自分の興味から拡大して話を広げていく【拡大展開型】，RC に対して批判的なところからスタートするが対話を繰り返すうちに理解が促進されていく【批判応答型】，本来自分が持っていた疑問を対話の中で解決していく【自問自答型】という 3 つの特徴的なモデルが提示できた。これらを適用することが，所属団体等の属性とモデルの関係性を考慮したカリキュラムの構成や，モデルどうしの関係性に基づいた対話の時間のグループ分けの基準など，今後の RC における人材育成を発展させるきっかけへと繋がるだろう。